



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1994 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

## 贖いのしもべ

1 「父が自分の手に万物をゆだね。」(ヨハネ13・3)

過ぎ越しの食事をするために弟子たちと共に高間におられたキリストはすでにこのことをご存じでした。地上の生涯を通して救い主として働かれる間もご存じでした。そして今はつきりと決定的に知っておられます。承知の上で、裁かれ十字架の死を宣告されることになるゲッセマニに向かわれます。その自覚と確実性がご自身の苦しみとなるのです。人間としての、言いようのない苦しみ。それは贖いの犠牲となるのです。

とを理解できませんでした。キリストだけがご存じだったので。御父はキリストの御手に神の国の未来を、人間の歴史の終末を委ねられました。そして最後にキリストが御父に全てを返し、「神が全てにおいて全てとなられる。」(1コリント15・28)

2 全てを自覚しておられたということは同時に、愛の極みを意味します。「イエズスはこの世から父のもとに移るときが来たのを知り、この世にいる御自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された。」(ヨハネ13・1)

「限りなく!」この「限りない」愛から聖体が生れ、この「限りない」愛からゲッセマニとゴルゴタが生れました。死ぬまで、十字架上の死に至るまでの従順が生れ(フィリッピ2・8参照)、聖体が生れたのです。

御父のもとに移るとき、キリストは私たちを置きざりにできないことをご存じでした。御父が「自分の手に万物を委ねられた」のですから、留まらなければならなかったのです。造られた宇宙の全てと同じように過ぎ去ることはできませんでした。単に歴史に入るのはなく、歴史を越えて、歴史のうちに留まらなければならなかったのです。それは神が全てにおいて全てとなるためでした。(1コリント15・28参照)

3 記念であり、秘跡である聖体。今日心をこめて味わいたいものです。聖木曜日「主の晩餐」の典礼ほど、この出来事の真の「記念」となるものはありません。「私たちがこのパンを食べ、この杯を飲む」時、主が来られるまで主のご死去を告げるたびに、キリストの血における新しい契約、新しい永遠の契約を表明するたびに(1コリント11・25、26参照)

この秘跡は本来の力によってその深みでとどまり、現存します。御父によって、その御手に「万物を委ねられた」キリストが、しもべとして歴史の最後の時に登場します。預言者イザヤの伝える神のしもべの姿はキリストにおいて完全に実現しました。「あなたたちは私を先生または主という。それは正しい、その通りである。」(ヨハネ13・13)今、父によって万物をその御手に委ねられた御方、先生・主があなたの足を洗っておられる。それはしもべの仕事です。キリストはそれを実行なさいました。その行為はいつまでも続きます。良心の光として。人類を贖

## 赦す神と、司祭

(…)現在使われている罪の赦しの秘跡・カトリックの儀式書には、罪人が神に立ち返り、内的秩序を取り戻すというすばらしい事実が述べられています。「全能の神、あわれみ深い父は、御子キリストによって世を yourself に立ち帰らせ、罪のゆるしのため、聖霊を注がれました。神が教会の奉仕を通してあなたにゆるしと平和を与えてくださいますように。」さて、赦しの秘跡(教会の奉仕)は、神の力によって効力を発揮するがゆえに、秘跡を執り行う者の人間的資質、適格・不適格とは関係なく神の赦しをもたらすものです。「カトリック教会のカテキズム」によれば(赦しばかりでなく全ての秘跡に共通して)「秘跡は、それが意味する恩寵を与える。それが効果を発揮するのは、秘跡を行うのがキリストご自身だからである。洗礼を授けるのはキリストであり、秘跡において働き、秘跡の示す恩寵を与えるのはキリストである。御父はいつでも御子の教会の祈りを聞いてくださる。」(c.1127)「これこそ、秘跡は秘跡自体の働きによって実現する(事効的効力)という教会の主張の意味である。」(c.1128)

### 贖罪司祭の聖性は重要

秘跡の式文で宣言される平安が「あらゆる人知を超えらる」(フィリッピ4・7)超自然

の平和であり、秘跡自体の効果によつて靈魂に入るものであることに、疑いの余地はありません。とは言え、それが可能である限り、また超自然的な超越性を認めたと、秘跡を受ける側がこの平和を十分に得るには、赦しの秘跡を授ける司祭の聖性、研究によつて得る学識、心理的感受性、暖かく親切な態度などが大きくものを言うのです。実に、聴罪司祭は取り戻した恩寵をしつかりと保つよう勵まし、救いへの信頼を養い、秘跡を受けた人が謹んで神に感謝するよう促し、病気の場合や精神異常すれすれの場合は別として、良心と健全な判断力のバランスの回復を助けます。

以前、赦しの秘跡の教義、道徳、教会法上の局面について話しましたが、今回は、赦しの秘跡の授与について具体的に述べ、先に言った秘跡授与者の聖性、心理的感受性、暖かく親切な態度などについてお話ししたいと思います。

聴罪司祭がまず心すべきことは、秘跡が有効となるための条件が満たされている限り、秘跡がもたらす本質的效果のみならず、秘跡を受ける側も、諸聖人の通功を通して、秘跡授与者の個人的な聖性の実りを得るということです。すなわち聴罪司祭による主への取りなし、説得力ある模範、聖なる司祭が悔悛者の肩代わりをして果す罪の償い、など。これらは当然のことです。しかし私が切望するのは、聴罪司祭が単なる義務とし

てではなく、愛をもつて罪の赦しを与え、父、兄弟としての贈り物のために祈り、犠牲を捧げることです。「今キリストの体である教会のために、私の体をもつてキリストの苦しみを受けた所を満たそうとする。」(コロサイ1・24) 赦しを与えるとは聖なることであり、授与者自身を聖化する手段でもあります。

▲ 聴罪司祭には、少なくとも通常の場合の人々の言動に

対処できるだけの倫理、教会法上の訓練を積んでおく重大な義務があります。その際には、社会に広がった精神風土がもたらすあれこれの条件を特に考慮に入れなければなりません。特に今「少なくとも」と申しましたが、すぐにつけ加えるなら、こうした教理上の準備はたえず向上され、かつ教義と道徳の原則にのっとり強化されるべきなのです。そうしてこそ、歴史に現れる文化上、技術上、経済上その他の変化が次々に引き起す難問に対し、悩める良心にカトリック的な解決方法を指し示すことができるのです。ここでも「カトリック教会のカテキズム」が役に立ちます。それは、人間の生活の中で実際に起っている、あるいは統計上、現在広範囲に見られる現実について下すべき道徳的判断を權威をもつて提示してくれま

す。これに関して、新しいカテキズムは、新しい戒め、新しい罪について考えるけれども、自然法で

あろうと啓示された法であろうと、常に同じ神法を現代のさまざまに人間行動に適用させると批判されます。ここで聴罪司祭には、特に重大かつデリケートな課題が課せられています。欠くことのできない健全な教理を適用して、告白に来た人が自らの罪を認識できるように助けなければなりません。それには、道徳的完全性という要求をゆるめる場合もあります。大罪を犯した時にはこのような完全性が要求され、罪の種類とそれを決定する状況、罪の数を言い表さなければなりません。告白が忌むべき苦痛に満ちたものとならないよう、特に宗教心の弱まっている人や改心し始めたばかりの人に對しては手心が必要です。とくに、十戒の第六戒に関する事柄に對しては神経のこまやかさが必要なことを強調しておきます。

さらに人間的な限界というものもありますから、聴罪司祭は秘跡の執行に際して、自分の落度ではないにせよ、十分な用意ができていないという事態に直面することもあり得ます。倫理博士アルフォンソ・リゴリオの黄金律によると、聴罪司祭は、少なくとも問題があるかもしれぬという可能性を察知できる程度まで教理面での知識を持つていなければならぬということになり得ます。この場合司牧上の慎重さと、加えて謙遜になり、急を要するかそうでないか、告白者が不安を感じているか否か、その他具体的な状況を考慮し

て、告白者を別の聴罪司祭の所へ差し向けるか、それとも別の日に話し合う約束をして、その間に必要な準備を整えるかを決めることにもなるでしょう。これに関して権威ある著者の書物を参照できること、また告白の秘密は絶対に厳守しますが、自分よりさらに知識と経験に富む司祭、特に教皇庁内赦院の助けを借りられることを念頭に置けばよいでしょう。内赦院はいつでも具体的な、個別的な事例を受けて、権威ある助言を与え用意ができています。

▲ 告白は心理療法ではない

赦しの秘跡は精神分析や心理療法の手段ではないし、そうなるべきではありません。とは言え、適切な心理学的訓練や、一般に行動科学を採用することによって良心という神秘の領域への洞察を深め、真に「人間的」な、従つて道徳上の責任を負うべき行動と、「ヒトとして」の行動すなわち病的な、あるいは身についた習

慣に左右される心理状態の如何によつて、責任能力が消えたり減ったりするような行動とを識別する(時には困難な仕事ですが)ことができるようになるのも事実です。告白者自身が両者の違いに気づいていない時も多いのです。こうして小心におちいった人々に対して持つべき忍耐、理解、慈愛といった美点が身につきます。それと同時に、現代の考え方の中には、少なくとも全面的には容認できないような事柄について、習慣的になつたものが本人の意志によつて始まつたものである故に、実にはたやすく許してしまう場合があまりにも多いことをはつきり申し上げねばなりません。聴罪司祭のこまやかな神経は、告白を恥ずかしがつてうまく話せないでいる内気な人々を助けるための大きな力となります。慈愛を伴つたこのようなこまやかさは、困難を察知し取り除き、告白者の気持ちに案にすることができなのです。主イエズス・キリストがどのよ

教皇さまの動き(九四・一月) パチカン便り

- 1・9、主の洗礼の祝日、41人の子供に洗礼を授け、幼子に信仰の賜を与えるよう勧められた。
- 1・15、各国外交団へ、道徳面での再生への努力と「大胆な兄弟愛」を要請された。
- 1・24、聖座の新設プレス・オフィスで記者たちに「皆さんの技術を真理のために役立ててください」と話された。
- 1・28、控訴院で、「人定法は真理を反映させるべきである」と言われた。
- 1・31、世界から集まつた子供達の聖歌隊に「皆さんの生活を愛の歌にしてください」と話された。
- バルカン半島の平和を祈願して、聖ペトロ大聖堂の扶助者マリア像(11世紀)前の平和のランブに火を灯された。

# 説教・講話・書簡等の抄訳

うに罪人に接しておられたかは、聖パウロがテイトに書き送った事実を見ればわかります。「救い主なる神の慈しみと人間への愛が現れた。」(テイト3・4) それには福音書に出てくる罪の女の物語(ルカ7・36-50)や聖ヨハネの記す感動的な姦通女の記事(8・3-11)と、あのすばらしい放蕩息子のたとえ話(ルカ15・11-32)などを黙想すれば十分です。赦しの秘跡を授ける司祭は、この神的な模範から靈感を受け、ダンテ・アリギエリが聖ルカに捧げた賛辞に価する者となる恩寵が与えられるよう、神に願うべきでしょう。

う。「キリストの慈しみの書き手」、書物のページではなく、魂という生きたページの上に書き記した著述家、と。

**愛に燃える心で**

聴罪司祭は、告白の場でどんなに大変な罪、途方もない告白を聞いても、驚きを見せてはなりません。罪そのものよりも罪を犯した人間を責めるような言葉を出してはなりません。恐怖心ではなく、うやうやしい畏敬の念を植え込まねばなりません。行いを正しく判断するために必要でないかぎり、告白者の生活を詮索すべきではありません。

りません。傷つきやすい人が相手であるとしても、たとえそれが正義や慈悲に反する言葉ではなくても、人を傷つけるようなことを言うべきではありません。いらだいたり、時間を気にする素振りを見せたり、告白者に対し急いで下さななどと言って、心を傷つけるようなことがあつてはなりません。(もちろん告白が無益に長たらしい場合は別です。) 聴罪司祭のすべき態度に関して言えば、落ち着きを示し、驚きや非難、あざけりなどをおわせる素振りを出さないことです。同様に、告白者に対して自分の好みを押しつけず、

告白を面と向かって行うか、告解室のカーテンのかげで打ち明けるかについては、相手の意志を尊重するべきであることを、申し上げておきたいと思えます。

▲最後に勧めます。告白者のあやまちが大きなものであればあるほど、大きなあわれみを示してください。司祭が告白におもむく時、自らの罪に対し一般の信徒よりも謙遜になり、尊厳を失ったことに自責の念を覚え、あの無言のつがめ「主はふり向いてペトロを見つめられた」(ルカ22・61)を思い起しましょう。ペトロはほんの数時間前に司

祭職を授けられたのに罪を犯して倒れてしまいました。主の慈しみ深い眼差しのおかげで、絶望から立ち上がる事が出来ました。お気づきのように、信仰に照らされた理性について話し合った今までの話は、私たちにとって大きな意味を持っています。赦しの秘跡を授ける時、皆さんの心、司祭の心が愛に燃え上がり、無限の距離を越えて柔和で心へりくだったイエズスを捜し求め、その姿を映し出しますように。神のあわれみによって皆さんにこの恵みが与えられるよう、使徒の祝福を贈ります。(九三・三・二七)

キリストの勝利は常に「賜」ではあります。個々の人間が積極的な、行いを伴った協力をしない限り手に入れることはできません。だからこそ改心が必要なのです。

り、改心させてくださるのは神であることをつかり自覚し、その自覚に従った努力をしなければなりません。

赦しの秘跡は洗礼後に犯した罪の赦しのために制定され、信者はこの秘跡において積極的役割を担っています。それは(特別な場合を除いて)個人的に司祭に「告白」して自

いに個人的にあずかったしるしとして司祭が命じる「償い」を果すこと、そしてその後、受けた赦しに感謝することです。

信者は受け身ではなく、儀式的・形式的に赦しを受けるのではありません。それどころか、過ちを告白し、赦しを願うことによつて恩寵を受け、罪に対して自ら積極的に戦いを挑みます。

赦しは根本的には賜ですから、赦しをいただいた人は、言葉と生き方で感謝を表すべきものです。

罪に対する責任ほど個人的で避けられないものはありません。また、悔い改めと神の慈悲を求める希望と祈りほど個人的で避けられないものはありません。

改心とは聖霊に導かれ、罪人を招く旅、神の言葉に照らされて自分の考え方や生き方を絶えず問い直す旅のことです。

## 黙想の栞 改心とゆるし

改心は和解と一致に達するため前提・不可欠の条件です。

罪の自覚は祈りを引き出します。生き方、考え方を改め、神や人々と和解するためには、改心が神ご自身のお与えになる賜である

分の過ちを認めること、神に加えた侮辱を痛悔する(悔い改める)こと、神の赦しの「有効なしるし」を受けするために教会の職位的司祭職に謙虚に従うこと、私たちが罪のために犠牲となり、御父にご自分を捧げたキリストのつぐな

1 「司教は使徒の後継者として、全ての人が信仰と洗礼と掟の遵守を通して救いに達するように、天上と地上のすべての権能を受けた主から、あらゆる国民に教え全被造物に福音を宣教する使命を受けた。」(教会憲章24番) 第二バチカン公会議が教えるように、司教は使徒の後継者として、イエズス・キリストが十二使徒と教会に委ねられた使命を受けています。

# 教え、聖化し、 治める司教

### 教会シリーズ 18

から受けた「使命であり、使徒たちが受けたのと同じ使命です。それは司教団が全体として担う責任です。そして、使徒から受け継いだ遺産、つまり聖なる権能と使命は、司教団を構成する一人ひとりの司教にも受け継がれています。今回はこれについて公会議のテキストにそつて考えてみましょう。公会議はこの問題に関して権威ある確かな教えを示しています。

2 個々の司教の使命は、はっきりと明示された領域で実

# 不変の教え

行に移されます。「諸部分教会の上になたてられている各司教は、自分に任せられた神の民の一部分の上とその司教的統治権を行使するのであって、他の部分教会や全教会の上にそれを行使するのではない。」(教会憲章23番)これは司教に与えられる教会法上の派遣に規定されています。(24番参照)

## 3 普遍教会と各教区

最高権威の行使は、いかなる場合でも、地方共同体の利益のためだけでなく、ローマ教皇と一致する司教団に共通の普遍的使命に関して、全教会の利益のために行われるよう保証されます。これは「ペトロの任務」の実行に際して守られるべき基本原則です。

## 4

大多数の司教はその司牧任務を教区内で行いますが、

「教区とは、司祭団の協力のもとに牧するよう司教に委託された神の民の一部分である。こうして自分の牧者に結ばれ、その牧者によって福音と聖体を通して聖霊において集められた教区は、部分教会を構成する。この中に、聖公、使徒継承のキリストの教会が真に現存し、働いている。」(11番)

すなわち、部分教会が普遍教会の生命を生きているということである。普遍教会こそ教会の根本的な現実です。これこそが、教区とい

うものの最も重要で顕著な特質となつています。教区は通常地域的に分けられた神の民の一部分であるだけでなく、相応に評価され、尊重されるべき独自性と特徴を備えた、普遍教会の一部なのです。歴史が証明するように、ある場合には個々の民の間で、あるいは普遍教会においても、これらの価値はすこぶる重視され、広く認められています。しかし、いづくにおいても、教区の多様性が教会の霊的富を増加させ、司牧任務の実行を助けていると言えます。

公会議はまた次のようにも述べています。「部分教会

## 国際家族年と 聖ヨセフ

(一九三九年九月、ローマで開かれた国際聖ヨセフ・シンポジウムのために、教皇様は書簡をお寄せになつた。)

(一) 処女マリアの夫ヨセフは、受肉されたみことばの秘義に全く特別な参与をするよう召されました。(「救い主の守護者聖ヨセフ」1番参照) それゆえ、聖なる御母抜きにはイエズスについて語れないのと同じく、非常に特殊なものではあったが真実まことの「父性」をもって神の子の父と

の世話を委託された各司教は、ローマ教皇の権威のもとに、それらの教会の固有、本来、直接の牧者として自分の羊たちを主の名において牧し、彼らを教え、聖化し、統治する任務を行使する。」(前掲書11番) 自分に委ねられた人々への司教の裁治権は「固有の、通常権であり、直接に」委ねられたものです。しかし、教会の秩序と一致を保つために、この権限はローマ教皇の権威と厳密に一致して行使されなければなりません。また、教会の組織の歴史的発展に従って、司教は「総主教または、位階上の他の権威者に合法的

に与えられている権限を認めなければなりません。」(11番) 公会議が指摘しているとおおり、いずれにせよ最も大切なことは「主の名において」その使命を実行に移すことなのです。

5 こう考えると、自分に委ねられて人々のさまざまの条件、状態の中に、司教の任務の構造的・霊的・司教的価値が提示されています。「司教は、キリストの証人として、全ての人に対して自分の使徒的任務を果さなければなりません。すなわち、すでに牧者たちのかしらに従っている人

何らかの方法で真理の道から離れていった人々や、キリストの福音と隣れみ深い救いを知らない人々に対して全力を尽くして働きかけ、全ての人が「全ての善と正義と真実」(エフエズ5・9)において歩むようになるまで努力しなければなりません。」(11番)

司教は「人の子」に倣わなければなりません。イエズスがザケオの家に立ち寄られた時に言われたように、人の子は「見失ったものを尋ねて救うために来た」(ルカ19・10)方だからです。これが司教の任務の本質なのです。(次号に続く)

しての役目を果たした人物(同21番参照)を思い起すことなしには、イエズスとマリアについて語ることはできません。

一九八九年に出された使徒勸告「救い主の守護者聖ヨセフ」の中で私は、神の摂理が救いの計画において聖ヨセフに託した特別な役割を強調しました。今回のような学究的シンポジウムにおいて、聖ヨセフに関する聖書のメッセージを深く究めると同時にキリスト信者の「信仰の感覚」を探るのがねらいとなつているのは喜ばしいこ

とです。代々を経て従う人々の心に語りかけ、贖い主の守護者であつた人を信者の守護者・模範としてお示しになる聖霊の声に耳を傾けることになるからです。

福音書に見える聖ヨセフは「正しい人」(マテオ1・19)であり、マリアと共に信仰の困難な旅路をたどりました。ヨセフへの指図は時としてあいまいで、起つた出来事はしばしば人間の論理や身の安全とは矛盾するかに思えるものでした。このような「あいまいさ」は、私たちの信仰に常につきまとう状況ではないでしょうか。

聖ヨセフの勇敢な信仰こそ、今日教会が必要とするものであり、それがあつてこそ教会は新たな福音宣教という緊急課題に勇気をもって取り組むことができます。

ヨセフは「働く人」でもありま

す。現代、仕事は私たち個人の、また社会生活の中心となつており、まさしく社会問題の「鍵」でもあります。(「働く人」について) 3番参照)

さて、キリスト者の家庭は、聖ヨセフという手本から何を習えたいのでしょうか。国連は一九九四年を国際家族年と宣言しましたが、いかに現代社会が家族の尊厳を回復させる必要を痛感しているかがわかります。ヨセフが「配偶者」で「父」としての独自の召命を受けて暮らしていたナザレトの家には、家族に対する神の計画がまぎれもなく現れていました。

このように聖ヨセフは「信仰の人」「働く人」「配偶者・父」の模範として、私たちに示されているのです。(一)

★ ★ ★ ★

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡 護符等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料七百円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393